上海バンドで目の前が真っ暗になった

男は

「あなた、日本人、ですか」

と声をかけてきたのだった。旧市街にある豫園商場を抜け出て、あてもなく、バス停で地図を広げていたとき。

「私、日本の会社、勤めています。何度も、日本へ行きました。あなた、仕事、何していますか」

「私、今度また、日本へ行きます。日本のお金がいります。日本のお金と中国のお金、交換してくれませんか」

「一万円と五五〇元。いいですか」

僕は頭の中で計算し、一万円で五五〇元だったらほぼ正規のレートだ、闇のレートにすればたぶん安いのだろうけれどもまあいいかなと思った。悪い人ではなさそうだし。

「いいですよ」

と答えると、男は人通りの少ない場所へ連れていき、五五〇元の札束を差し出したのだった。

ナップサックを開けて、手を突っ込んで、パスポート袋を取り出そうとした。袋にはパスポートと現金一〇万円、それにトラベラーズチェック四〇万円が入っていた。ところがその袋がないのだ。

「あれっ？」

「どうしましたか」

と男は僕を覗き込む。

「おかしいな、ここに入れてあるはずなのに」

「お金、ありませんか」

「おかしいな、ホテルに忘れてきたのかな」

「あなた、大丈夫ですか。本当にホテルに忘れてきましたか」

僕は分からなくなる。ホテルを出るときに、確かにナップサックに袋を入れたという気がする。ずっと歩いて駅まで行ったから、それまではすられる隙はないと思う。駅から旧市街まではバスに乗ったから、そのときにすられたのかもしれない。

豫園では人と接触していないのであまり考えられないが、そこを出てから、赤ん坊を背負った女の物乞いに追いかけられた。あまりしつこいのでサイフを開けると、彼女は中を覗き込んで、これだこれだと言うように一〇元札を指差したのだ、一元札を取り出そうとする僕の動作を制するようにして。しかし彼女にすられたというのも考えにくい。それからしばらくして、二人組の男に声をかけられた。彼らは豫園商場の中に店を出し

ていると言っていた。あれこれ話しかけたあと、チェンジマネーを口にしたのだった．人民幣がほとんどなかったので喜んで交換したのだった。たぶんレートが安かったからかもしれないが、してやったりというような顔をして「また店へ来いよ」と言い残して彼らは消えたのだった。その交換のとき、僕は全く無防備だった。ひとりと交換しているとき、もうひとりはどうしていたのだろう。そのあいだにやられたのだろうか。

「あなた、大丈夫ですか」

と男はしきりに尋ねる．

「いくら入っていましたか」

「五〇万円…」

「五〇万円！」と驚いたように、男は繰り返す。

「心配ですよ．あなた、心配ですよ．大丈夫ですか」

「ホテルに忘れましたか。すぐにホテル、帰りなさい。私、タクシーの乗り場まで案内します。すぐに帰りなさい」

男は大通りまで案内して、消えた。

タクシーを待ったけれども、空車は来ない。

仕方がないので、黄浦江の外灘（バンド）沿いの大通り、中山東路をホテルの方（北方向）に歩き出した。途中のバス停でバスに乗るつもりだった。

三〇分ほども歩いただろうか。その間、いろんな疑いが、頭の中に芽生えては繁殖してくるのだった。考えれば、さっきの男までが怪しいとも思えてくる。今にも頭がパンクしそうだった。ホテルに忘れてきたという可能性はあるのだけれども、疑いの方がめまぐるしく渦巻いて、きっとどこかで誰かにすられたんだ、という思いが圧倒していた。自分が情けなかった．どうしてパスポート袋を首にかけておかなかったのかと何度も思いはそこに戻ってくるのだった。

茫然としながら歩き続け、ふと通りの名前を記したプレートを見ると、中山南路となっていた。地図を調べてみると、僕は北の方へ歩いているとばかり思っていたのだけれども、実は、一生懸命南の方へ歩いていたのだった。愕然として、今にも泣きそうになりながら、引き返した。

途中に船の乗り場があり、大勢の人々がちょうど到着した船から吐き出されてきたが、僕は八つ当たりするように人々を押し分けて歩いて行ったのだった。

やがてバス停があった。バスに乗り込み、二角（四円）の運賃を払い、席に腰を下ろす頃には、僕の中ではパスポート袋をすられたことはもう事実になっていた。パスポートの再発行に領事館に行くことや、トラベラーズチェックの再発行のために警察や銀行に行くことやらがめまぐるし

く頭の中を交差した。もう旅を止めてしまおうか、とも思った。止めざるをえないだろう。そもそも二か月間も休みを取って、こんなあてのない旅に出たのが間違いだったのかもしれない。こんな目的のない人生はそもそもおかしいのかもしれない。

ふと見上げると、バスは満点で、僕の前に立っていた少女が僕の手元の地図を指差して何やら尋ねている。

「我不知道（分からない）」

と答える。それどころじゃなかった。

バスを乗り継いで、ようやく、海佳飯店の最寄りのバス停に到着した。急く気持ちをわざと抑えるようにしてロビーを渡り、階段を登って行った。

「どうか、パスポート袋がありますように」

部屋の扉を押し開ける。昨夜一緒に散歩をした女性がいる。ベッドの枕を上げる。そこにパスポート袋は、あった！

震える指でパスポート袋を取り上げた。

安堵と疲れが一度に押し寄せてきたのだった。ベッドに腰を下ろし、部屋の壁にもたれて、もう何があっても大丈夫だ、という気がした。気持ちの問題として、心の体験として、最悪の状態を体験したのだから、これ以上のことはないだろう。

僕は昨夜商店で買ったお茶の葉をコップに入れ、お湯を注いだ。煙草を吸い、お茶をゆっくりと飲んだ。ようやく体と心の震えが止まっていくようだった。

ふと見ると、同室の女性の表情がさえない。どうしたのか、と尋ねると、彼女は大連行きの船のチケットをひらひらさせて、

「一六〇元よ、一六〇元」

とぶっきらぼうに答える。

彼女の言うところによると、船のチケット売場に並んだあげく、チケットは売ってもらえなくて、別の場所に連れていかれて、一六〇元のチケットを買わされたのだという。

おそらく特等席の外国人料金なのだろう。船にせよ、列車にせよ、あるいはホテルにせよ、中国政府は外国人が一般中国人と一緒になることを好まない。ホテルなら一般中国人が泊まれない高級ホテルにしか外国人は泊まれないし、列車でも船でもそうなのだ。特に、途上の自由度が高くて時間も長い船は厳しいのだろう。もちろん一六〇元といえば、日本円で三二〇〇円、たいした額じゃない。僕もそう言って披女を慰めたのだけれども、その額は都会に住む中国人の平均月収の半分程度、農村部の月収の

倍程度の額だということは知っていなければならない。

ホテルのベッドでひと息をつくと、急に腹が減ってきた。昨夜の散歩で見かけた屋台のような食堂と、それから通りを少し入ったところに小さく灯っていた銭湯の明かりのことを思い出した。屋台で腹ごしらえをし、中国の銭湯に入ってみようと、タオルと石鹸を持って、ホテルを出た。

歩道に面してコンロが置かれ、その上には中華鍋。粗末な食堂の中を覗き込むと小さなテーブルが三つほど並べられ、何人かがテーブルを囲んでビールを飲み、食事をしている。誰かが頼んだのだろう焼きそばが出来上がって、運ばれていく。中華鍋に向かっている女の人に「炒面（チャオメン）」と告げて、椅子に腰かける。みんなが少し奇異な目をして見ているのが分かる。しばらくして焼きそばが来る。それだけでは足りないので、他のテーブルの料理を指差して、

「ゲイオーチャーイーガ（これをひとつ下さい）」

と注文する。

たまりかねたように客のひとりが尋ねる、

「どこから来たのか」

「日本から」

「海佳飯店にいるのか」

「そうだ」

ようやく皆が納得する。

「ビールはいらないのか」

と店の人が尋ねる。

「いらない」

「そうか」

焼きそばと、うずらの卵が二〇個ほども入ったきくらげとピーマンの炒め物を食べて、七元。満腹になって、店を出た。

大通りから細い路地を入っていくと、銭湯の明かりがもれていた。入口の看板を確認して、建物を入っていくと、チケット売場になっていた。入浴料の他に爪切りとかマッサージとかの料金がずらっと並んだ料金表が掲げてあった。窓口の男は何かを尋ねるのだが、さっぱり理解できないので、適当に相槌を打って、料金二・一元を支払ってチケットを買った。チケット売場の右側が男風呂、左側が女風呂になっているらしい。

扉を押し開けると、湯気と裸の男たちのむっとするような熱気が押し寄せてきた。見ると幅一メートルほどの通路をはさんで、両側に二〇ほどの簡易ベッドが並んでいる。男たちは素裸であるいは腰のあたりにバスタオルを被せて、思い思いの格好でくつろいでいた。素裸の中国人たちの

その肉体の圧倒的な存在感のようなものが瞬間僕を立ちすくませた。それはある種異様と言ってもいいような存在感だった。一片も理解できない中国語が飛び交っていた。店員は何やら大声を上げながら、客たちの服を長い棒で天井に吊り上げたり、下ろしたりしていた。

ぼんやりとして立っていると、店員が空いたベッドに案内した。脱いだ服を長い棒の先にひっかけると器用に天井に吊り上げる。裸になって部屋の奥の方に入っていくと、通路があり、すぐに湯船があった。日本の銭湯の湯船に比べると小さくて、全体が狭苦しい感じなのだが、白い浴剤を入れたような白いお湯は気持ち良かった。体を洗い、頭を洗い、二つしかないシャワーの順番を待って、体を流した。

湯船を出て、自分のベッドに戻った。中国人たちと同じように素裸で横になり、腰にバスタオルを被せた。吹き出す汗を幾度も拭いながら、ここ、上港の下町の銭湯でこのようにしている自分がとても不思議だった。まわりは見知らぬ中国人ばかりだったけれども、最初ここに足を踏み入れたとき感じた「異様さ」というものはかき消えて、不思議にリラックスしているのだった。

パスポート袋をホテルの部屋に忘れたことも、中国という何か大きなものが旅の最初に浮き立っていた僕に与えた教訓のようにも思えてくるのだった。あの事件のおかげで、僕は今日、半日間をただホテルに戻ろうとして上海バンド沿いの中山東路、南路を青い顔をしてうろついただけだったのだけれども、そしてそのときにはいろいろの物思いが渦巻いて、とても風景を感じるという余裕はなかったのだけれども、だからこそ上海バンド付近の風景は客観物としてではなく、もっと深いところで僕の中に刻まれたという気がする。観光物など何も見ていないけれども、僕はとりあえず上海はもういいのではないか、という気がしていた。初めての中国になじむために何日かは滞在するつもりでいたのだけれども、旅を進めていくうちにいやがおうでもなじむことになるのだから。さあ！もっと中国のそのふところの中へ、入っていこう。

「さあ！」

と僕はひとりごちる。

ベッドから起き上がり、店員に服を下ろしてもらって、銭湯を出た。

表に出ると少し雨が降ったらしい。通りは雨に濡れて、夜を映していた。上海の夜。人通りのない濡れた通りに、ときおり、クルマのヘッドライトが駆け抜けていった。海佳飯店の赤いネオンが、通りの向こうに輝いていた。僕はこの夜の奥底へ、もっともっと寂しい所へこれから入っていくのだと感じていた。

※　一元は約二〇円

※

火車（ホーチャー・列車）がゴトンと動き始めたのは、時刻通り一三時二三分だった。五月一日、土曜日。今にも降り出しそうな厚い雲に覆われた上海を後にしようとしていた。

硬座の車内は満員だった．それぞれの出発に上気したような雰囲気が車内には満ちていた。候車室で行列をつくり、約三〇分前に改札が始まると押し合いに潰されそうになりながら、ようやくプラットフォームに押し出され、座席指定なのに早足で急ぐ人々に急かされるようにして重い荷物を抱えて小走りで車両を捜し、「ここだ、ここだ」とか「ここは俺の席だ」とかもめたあげく、ようやく自分の場所を確保したというわけだ。

火車が動き始めて、ようやく落ち着いた車内は、すぐさま煙草の煙で充満する。僕も残り少なくなってきたマイルドセブンをポケットから取り出し、一服した。煙草を吸いながら、胸のポケットに入れたチケットをもう一度つくづくと眺めた。五月一日、三六三次、四車八座、一一元。「外幣（ワイフェイ）券」というスタンプが押してある。外国人用のチケットで、ＦＥＣで支払われているという意味だろう。すでに報告したように、上海站ではチケット売場を見つけることができなくて（チケット売場は街中にあるはずなのだけれども、その場所を捜して、列に並んでという労力が惜しかったのだ。おまけに窓口にたどり着いたとしても、チケットを売ってもらえるという保証はないのだ）次善の策として、今朝、外国人用の窓口で手に入れたのだった。

外国人用の窓口はひとつしかなくて、そこに数人が並んでいた。列に並んで待ちながら、僕は昨日買った時刻表を横目に、

「今天、第三六三次、到杭州（チンテン、ティーサンリュウサンツー、タオハンチョウ）」

とぶつぶつ繰り返していた。やがて順番がきて、ＦＥＣを支払って、チケットを手にしたときはうれしかった。軟席候車室の椅子に座を下ろして、飽きずにチケットを眺めていたのだった。

上海站前広場を横切って、再び旧市街行きのバスに乗った。バスは二両連結の大きなもので、それぞれの車両に車掌がいて、チケットを売っている。車掌に行き先を告げて、二角札を差し出す。この路線は上海站から上海の中心を通って旧市術へ至るので、車内はぎゅうぎゅう詰めなのだっ

た。

身動きもままならないまま、上港市街の混雑した街並を眺めていた。繁華街に近づくと、西欧風の立派な建物が大通りに画して並んでいる。やがてバスは旧市街の入口、北門に至り、僕は乗客をかきわけるようにしてバスを降りた。

そのまま南に下ると、昨日行った豫園という庭園とその脇に豫園商場という市場がある。無数の小さな商店がひしめきあい、路上を行き交う無数の人々でごったがえしている。

バスを降りた僕は、そこから東の方向に歩き出した。上海の東の脇を流れる黄浦江の流れを見たかったのだ。

中山東路を横切ると、渡し船の乗り場があった。往復二角の料金を支払うと、プラスチックのコインをくれる。乗船のときにこれを渡すのだ。しばらく待っていると、渡し船が到着した。自転車に乗った人々がいっせいに吐き出されてくる。あるいは何台かのオートバイ。そして歩いて降りてくる人々。降船が終わると、乗船のゲートが開けられ、なだれ込むように自転車の人々や歩きの人々が乗り込んでいく。やがてゆっくりと渡し船は動き始めた。

どんよりと曇った空の下に上海の街並は横たわっていた。西欧風の比較的低いけれども、立派な建物が並び、ところどころに高層の現代的なビルがそびえていた。対岸には巨大なクレーンが何台か動物のように大きな腕を振り上げていた。

渡し船を往復したあと、外灘（バンド）を歩いた。黄浦江沿いのその一帯は公園になっていて、たぶん土曜日だったからということもあるのだろう、老いも若きも、お上りさんも、まるでお祭りでもあるかのように、人々でごったがえしていた。アイスクリームをなめながら行き交う少女たち、写真を撮りあうカップル、飛び交う物売りの声、見本の写真を見せながら記念写真を呼びかける写真屋たち。中国人たちのエネルギーにあてられて、どこへ行っても雑踏という状態に少しうんざりしながら、海佳飯店に戻って、荷物をまとめ、杭州行きの火車に乗るために上海站へと向かった。

上港站前の広場に店を出していた快餐屋で、目玉焼と肉団子と野菜の弁当を三・五元で買い、店の前の階段に座って食べた。発泡スチロールの容器がゴミ箱からあふれて、そこここに散らばっていた。煙草を吸いながら、人であふれる上海站前広場を横切って、僕は候車室の方へ歩き出した。

上海を出発した火車はすぐにどこまでも平たい田園地帯が延々と続く風景に入っていった。まるで日本の農村風景を水平にどこまでも延長し

たかのような風景だった。どこかなつかしい、郷愁をかきたてるような風景。だが現代の日本ではもはや決定的に失われようとしている風景だった。この郷愁は僕自身の奥深くひっそりと忘れられたように息づいている農耕民族の記憶から発しているのだろう。そういう記憶からいうと、中国大陸と日本列島とは地続きなのだ。

車中では、皆がそれぞれの方法でくつろぎながら、時間を過ごしていた。テーブルにトランプを広げて、何やら分からないゲームに興じている若者のグループがあるかと思えば、ひまわりの種を食べてはその殻を床に捨てて、ゴミの山をこしらえているおばさんがいる。ある者は煙草を吸いながら、薄いエロ雑誌を読んでいる。いつまでも飽きずお喋りを続ける人たち、その脇を、発泡スチロールに入れた弁当を売る人が声を上げながら通り過ぎる。弁当売りの次には雑誌売り、そして煙草やジュース、ビールを売る人が続く。

時間の経過とともに、確実に増加していくのは、ゴミだ。テーブルにたまったゴミを時々、中国人たちは窓を明けて無造作に放り出す。箒を持った服務員が席の下からゴミを掃き出して行く。

駅に到着する度に乗り込んでくる人々は、席がないので通路に立っていた。下車する人の席が空くのを待っている。ある者たちは車両の継目やトイレの脇の空間に大きな荷物を下ろして、それにもたれるようにして座り込んでいる。誰かがトイレに立つと、立っていた人は素早くそ打席に腰を下ろす。しばらくして席の人が戻ってくると、当然のように席を明け渡す。席のことに関しては、とても合理的で整然としている。

このようにして列車で移動する中国人たちの多くが手にしているものはというと、お茶のビンなのだ。それは金属のふたが付いた広口のビンで、たぶん果物のビン詰めの容器なのだけれども、中国人たちはそれにお茶の葉を入れ、開水（沸騰したお湯）を入れて持ち歩くのだ。座席につくと、チビチビとそのお茶を飲み、お茶がなくなると、開水を注ぎ足しに行くのだ。火車には必ず、常時開水を補給できる大きな湯沸器が備えてある。

火車は約四時間で終点、杭州（ハンチョウ）に到着した。午後五時半項だった。